

原爆が投下された日

すみひろ
角廣 邦夫

昭和二十年八月六日午前八時、工場の始業ベルが鳴り響くと、学徒動員を含む従業員のすべてが、工場事務所前の空き地で朝礼に臨んでいました。十分後に再度ベルが鳴るのですが、このベルを合図に工場の機械類を始動させるため、機械配電室のスイッチが入ります。

その朝の配電室当番は私でした。朝礼終了後、ただちに配電室に入って待機していた私は、操業開始のベルを聞くと同時に、並列、縦列に並ぶ配電盤上のスイッチを次々と押し上げていきました。その時です。

“ピカッ”

眼前に紫紅色の閃光が走りました。本能的に身の危険を感じた時、すでに私の身体は空中に舞い上がっていたのです。地上に叩き付けられ、起き上がろうと両手で地面を支えて腰を浮かした途端、腰部に衝撃を受けました。破壊された建造物の残骸が、天井から落下してきたのです。その重量が増すにつれて、胸部にも強烈な圧迫が加わってきたのです。反射的に背部の重圧を除去しようと試みましたが、効果はありません。「何くそ！」懸命に抵抗しましたが重力に抗しきれません。

「アッ！ 落ちる、落ちる」私の意識は次第に薄れ、奈落の底に向かって落ちていきました……………。

「角廣！ 角廣！」遠い彼方から呼び声が近づいてきて、フッとわれに返りました。首を曲げて見上げた顔の上に、赤鬼さながらの魁偉な面が映し出されています。一瞬、何者かと戸惑いましたが、呼び声から上級生の班長と分かりました。当時、私は中学の二年生でした。班長自身、凄まじい負傷をしていたにもかかわらず、班長としての責任感から、部下である私を、瓦礫の中から掘り起こしてくれたのです。私は全身に脱力を感じ、しばらく動くことができませんでした。



そんな状態の私を、班長は自分の背中に背負い、工場の隅にある防空壕まで運んでいってくれました。見ると班長は上衣が焼失していて、半分裸です。壕内に入るや、班長は背負っていた私を投げ気味に降ろすと、深いため息とともに自身も腰を下ろしました。「ありがとうございました」と礼を述べると、返事をしないばかりか班長の顔が次第に引きつってきて、突然、後方へ倒れました。「ウツ、ウツ、ウツ」含んだようなめき声を発しながら痙攣が始まり、「ドタ、ドタ、ドタ、間隔を置いて、手足が上下振動を繰り返します。火傷の激しい顔面が硬直して、鬼気迫る形相でした。

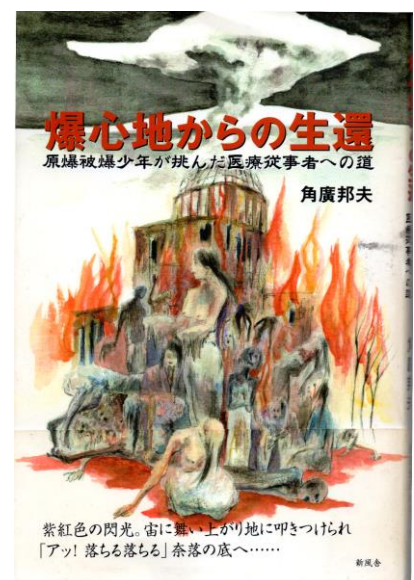
「班長！ 班長！」痙攣を繰り返す彼の動きを止めようと、叫びながら必死に両肩を押さえましたが効果はありません。時間にして数十秒だったか、数分だったか？発作が治まると、今度はピクリとも動かなくなりました。

ところが、しばらくしてまた痙攣が始まったのです。痙攣している動きを止めようと、再度「班長！ 班長！」と叫びながら必死に彼の両肩を押さえるのですが、効果はありません。発作が治まってからの班長はまた、ピクリとも動かなくなりました。虚空を睨んでいる彼に「班長、班長」と呼びながら何度も揺さぶるのですが、何の反応もありません。私の背筋に冷や汗が走りました。「死っ、死んでる！ 班長が死んだ」

恐怖にかられた私は壕を飛び出しました。ちょうど、工場事務所が建っていた瓦礫の前で、顔面を朱に染めた人物が何か叫んでいて、その人物の周辺に半裸姿の数人が佇んでいます。耳をそば立て神経を集中すると、「元気な者は、この場所に集合せよ」と叫んでいます。ふらふらとその人の前面に行きました。容姿は一変していましたが、怒鳴っていたのは学生引率の久保先生でした。「班長が、班長が」私が指差す防空壕に向かって先生は走っていきましたが、すぐに引き返してきました。「ダメだ一、何人かが残っている」。

先生の先導でわれわれ一行は、工場崩壊地跡から堤防の上にある一般道路に出ました。左右を見渡すと街全体が火煙で覆われて薄暗く、前面は太田川の流れて、川向こうに火煙はありません。左側、すなわち北側は激しく火煙が舞っていて、目前に迫ってきます。

この火煙の中から「幽鬼」さながらの人々が、続々と姿を現してきました。面皮がペロリとめくれ、その皮膚が顎の下まで垂れ下がっている人や、まるで面疔を患っているような顔貌の人がいます。また幼児を抱きかかえた半裸に近い女性がいたのですが、子供の頭部はザクロ



角廣邦夫氏の著書
新風舎、2006年

のように裂けていて、生死の判別さえつきません。母親は子供の名を呼んだり揺すったりしながら、面前を通過していきました。

道路上で倒れている人に足首をつかまれました。助けを求められたのではなく、「殺してくれ」と懇願されたのです。いくら相手が極限状態にあるといっても、自殺幇助は嫌だし、他人を構っている余裕なんてありませんから、振り解いて南進しました。

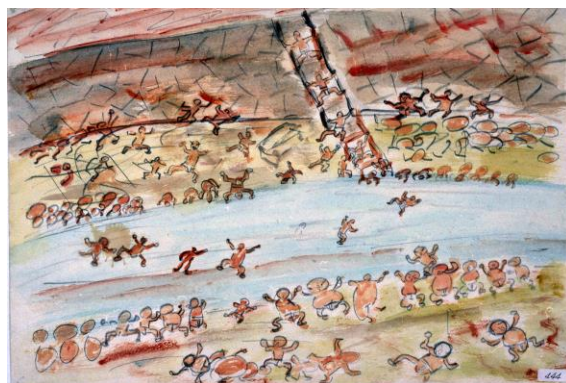
目を凝らして対岸を眺めると、己斐の町は火煙もなく、家屋の崩壊もない様子です。今までの道中で見た限り、対岸に架かっていた橋梁はすべて崩壊していました。この地点での太田川の川幅は広いので、水泳に自信のない人はとても泳ぎ渡れる状態ではありません。でも、後方から火炎が迫ってくるので、対岸に避難したいという思いが次第に募ってきました。堤防上を歩む他の人々も、当然同じ思いを抱いたのでしょう。泳ぎに自信のあると思われる数人が、川の中に入って対岸を目指しましたが、みんな水没して溺死するといういたましい悲劇が目の前で起こってしまいました。

「見てのとおりだ、危険を冒すことはない。どこかに壊れていない橋があるはずだから、もう少し辛抱して頑張ろう」久保先生の激励の言葉に従い、再び堤防上を南進することにしたのです。太田川に浮遊する多くの死体にさえ、もう何の感慨も湧いてきません。ただ黙々として、地獄街道を進みました。

しばらく行くと、歩行は鈍いが正装に近い風体の人が、われわれの前を歩んでいるのに気付きました。「あの人は被災者ではないのか」という思いも、われわれがこの人を追い越す際に振り返ってみて、間違いだったことが分かりました。前面は焼け爛れ、全裸に近い風体なのです。恐らく正面から熱射を浴びたのでしょう。

とにもかくにも、真っ当な恰好をした人など一人としていません。幼少の頃、ある寺で地獄絵図を見て恐ろしい思いをした記憶がありますが、それが今、現実として目の前にあります。「阿鼻叫喚」という言葉が映像化されて眼前にあることを、身をもって体験したのです。「悪夢なら覚めよ」と思えるこの光景は、暑い夏の日、白昼の出来事です。

さらに太田川の堤に沿って南進を続け、ようやく倒壊を免れた橋梁に到着しました。この橋は、現在のJR山陽本線の鉄橋で、広島横川駅と己斐駅を結ぶ架橋でありました。生き地獄から、この三途の川を“逆渡河、できたことは、生涯、私の脳裏から消え去ることはないでしょう。



太田川の惨状

画：山田須磨子 広島原爆記念資料館所蔵